

知らぬは教師のみ

長 広美

文京学院大学の長広美と申します。学会ホームページ委員会所属ということで委員長の
中岡先生よりご指名を頂きましたので筆を執らせて頂きます。本日は、私事で大変恐縮で
すが、教師として嬉しかった出来事についてお話をさせて頂きたいと思います。

名誉なことか不名誉なことか、私は学生から文京学院大学で「最も厳しい教員」の一人
と称されております。授業中、授業内容以外のことでおしゃべりすることを禁じ、学生が
携帯電話に触れることを禁じています。学生が机の上にカバンやバックを置くことも認め
ておりません。当然、ガムや飴、都こんぶ、梅干しなど、たとえどのようなものであれ授
業中に口をモグモグすることを禁止しています。

成績評価についても容赦ない教員です。ゼミ生であるからといって成績不良の学生に単
位をあげてしまうようなことはしません。平成 23 年度、私が担当する『メディア・コミュ
ニケーション』を履修した学生の内 20%以上の履修者は成績不良で単位取得ができません
でした。そんなわけで、学生にとってみれば私は「煩いクソおやじ」といった存在だと思
います。

ところが、煩いクソおやじの授業に対する評価や学生からの反応は、お粗末過ぎて目も
当てられないものと思いきや、まんざらでもありません。この上なく憎まれ役を演じてい
るつもりですが、役者の演技力が下手なのか、それとも学生が無神経なのか、外国語学部
所属の学生のほぼ 80%が選択自由科目（履修義務がない科目）である私の授業を毎年好ん
で履修しています。

今から数年前のことです。『メディア・コミュニケーション』の授業終了後、当時 4 年生
の女子学生が私の所へ来て言いました。「私、先生の授業を履修するのがこれで 5 回目なん
です。」と。何か文句でも付けられるかもしれないと警戒していると、彼女は私に言いまし
た。「長先生は本当に公平に学生を採点していたんですね。口先だけかと思っていたら、出
席や定期試験の成績が悪かった場合は、それに見合った成績で落とされており、若干努力
した場合は、それなりの成績で落とされていた。学生の態度や試験をキチンと評価してく
れる大学教員がいることが分かり嬉しく思いました。」と。クソおやじを演じてきた私にと
って報われる一言でした。

時は異なり昨年末。卒業研究の追い込みがかかってきた 12 月のゼミの時間。ゼミ生の
本気度が感じられなかった私は彼らに、「おいおい。ちょっと、皆、いいかい！あのね、、、」
と説教を始めようとしたのですが、途中で、「まあ、いいか」と自分に言い聞かせるように
声を発し説教を止めてしまったことがありました。かなり長い間沈黙が続き、女子学生 N
が静けさを破りました。普段は教室の一番奥に座りあまり発言することのない無口な学生
です。「長先生の『まあ、いいか』は、『どうでもいい』という諦めの意味ではないことを
私達は知っているよ。皆、頑張れよという意味なんだよな。」と。周囲のゼミ生達も同調し

ている様子で、この一声が切っ掛けとなり普段通りのゼミに戻ることができました。何も知らぬは教師のみだったということか？私が知っている以上に彼らは一回りも二回りも大きく成長しており、私を信頼してついてきてくれていたことに私自身が気づかされた瞬間でした。教師として最高の喜びを感じた瞬間でした。

これからも下手な役者ですが、教師であり続ける限り煩いクソおやじを演じ続けたいと思っています！